

特集

幕末の分岐点となった小御所会議

竹村 紘一

將軍慶喜、將軍職辞退の上書提出

大政奉還は討幕派の機先を制し、討幕の名目を失わせる狙いがあった。上書は將軍職辞任には一切触れておらず、慶喜は引き続き征夷大將軍であり武家の棟梁のままであった。討幕の密勅の下賜以降、薩摩藩・長州藩は芸州藩をも味方に引き入れて密かに討幕に向けての軍事動員を開始した。この動きを牽制するため、慶喜は十月二十四日に征夷大將軍辞職も朝廷に申し出る。幕府（慶喜）は、朝廷には政権を運営する能力も体制もなく、一旦形式的に政権を返上しても、依然として公家衆や諸藩を圧倒する勢力を有する徳川家が天皇の下の新政府に参画すれば実質的に政権を握り続けられると読んでいたとされる。見通しの通り、十月二十六日、朝廷は慶喜に政務を

委任の沙汰を出す。朝廷は急に政務をおこなうのは難しいとの判断で、慶喜の將軍職辞退を保留した。朝廷は上表の勅許と共に、国是決定のための諸侯会同召集までとの期限付ながら緊急政務の処理が引き続き慶喜に委任され、將軍職も暫時従来通りとされた。慶喜による政権掌握が続くことになった。この処置に対し武力倒幕派の薩摩藩や岩倉具視は大いに憤慨したが、決定を覆すには至らなかった。

大政奉還をした慶喜の狙い

同年十月十四日、十五代將軍徳川慶喜の大政奉還によって、徳川幕府は政権を朝廷に返還、密かに「討幕の密勅」を準備していた公家の岩倉具視や薩摩藩の武力倒幕計画は、空振りとなる。平和裏に政権交代が行なわれることに倒幕

派は当惑、大政奉還を推し進めた土佐藩はその成功に満足したが、新政権がどのような体制を採るべきかについてはまだ定まっておらず、当面は旧幕府が暫定的に政治を行ない、朝議は親幕派の摂政二条斉敬、中川宮朝彦親王が主導することになる。

慶喜は大政を奉還し、將軍職から退いたとはいえ、政権の中枢から離れる気はさらさらなく、四百万石の徳川宗家の実力を背景に、幕藩体制よりもさらに中央集権的な、近代的な新政権における絶対君主を目指していた。実際、経験・力量からいっても新政権の首班として最も相応しいのは慶喜であった。いずれ設置されると予測される諸侯会議の議長に就任すると見られていたし、慶喜自身もそれを想定していたようである。

しかし、薩摩藩を中心とする倒幕派にすれば、それだけは絶対に避けたいことであった。旧幕府の軍事力を背景にする前將軍慶喜が新政権の首班になるのであれば、実質的な徳川の優位は変わらず、むしろ「家康の再来」とも称された慶喜の恐るべき政治力により倒幕派が潰される恐れもあったので

ある。薩摩藩はそれまで、四侯会議などで慶喜に散々煮え湯を飲まされており慶喜の政治力を身に沁みて感じていたのである。島津久光が慶喜との連携を見限ったことが討幕の始まりであった。岩倉や薩摩藩は慶喜の思惑を叩き潰すために宮中クーデターを敢行することになる。

王政復古の大号令宣布

同年十二月九日、「王政復古の大号令」が出される。

早朝、岩倉具視ら倒幕派公卿、薩摩、土佐、越前、芸州、尾張の代表が御所に集まり、諸藩の藩兵により御所の九門全て封鎖。反対派を完全に排除した上で、天皇に「王政復古の宣言」を求め、「王政復古の大号令」が発せられる。天皇中心国家への復帰が宣言されたのである。文久三年八月十八日の政変の再現であった。

従来の摂政・関白等の官職・將軍職・京都守護職等の幕府体制が廃止され、新たに「総裁」「議定」「参与」という三職が設けられることに決定した。これにより、幕府に代わり新政府が発足する。

小御所會議開催

王政復古の大号令が発せられた日の夕刻、御所内の小御所に関係者が集まり天皇の御前で新体制の話し合いが行われた。

討幕派にとって、王政復古の大号令を、かけ声だけに終わらせないためには、もう一段階の重大な手続きが残っていた。それは徳川氏の処分であり、將軍慶喜の官位と徳川氏が所有する土地を返還させ、幕府権力を徹底的に弱体化させることであった。

そして、無血クーデターを狙う討幕派の陰謀として招集されたのが、維新史上有名な小御所會議である。小御所は京都御所内殿舎のひとつで、紫宸殿の東北にある書院造りの部屋である。

激論続く會議

會議は慶応三年（一八六七）二月九日夜に開かれた。主な出席者は、総裁・議定・参与などそれぞれ、思惑を秘めた新政府の最高幹部たちである。その他に薩摩藩の大久保一蔵（利通）・岩下方平・土佐藩の後藤象二郎ら各藩の重臣も許されて部屋に敷居際に陪席したが、議論が白熱すると、大久保

や後藤らも発言して、互いに舌戦を展開した。

徳川の権威を温存させようとする公議政体派の前土佐藩主山内容堂や越前松平春嶽らが慶喜を擁護する強硬な意見を述べ、主君容堂を補佐する後藤象二郎は謀略に等しく仕組まれたようなものだと、この會議を非難する熱弁を振るい始めたので、討幕派も押された。

土佐藩の山内容堂は、徳川慶喜を議長とする諸侯會議の政体こそ新政権のかたちとして望ましいとし、この場に徳川慶喜の出席を求めて岩倉と対立。「この會議に大政奉還の立役者である前將軍慶喜公を呼んでいないこと自体問題であり、王政復古宣言は一部の者の陰謀だと主張。これに対して岩倉や大久保らの慶喜排斥派（武力討幕派）は的確な反論に窮した。

しかし、勢いに乗る容堂の「これは一部の公家が幼沖の天皇を担ぎ上げておこなった陰謀であり、」との発言の言葉尻を捉えて、岩倉は「幼少の天皇とはなんたる叱咤する。幼少でも天皇は天皇である。当時十五歳だった天皇に対する非礼の発言をしたことに気付

いた容堂もこれには陳謝するしかなかった。容堂は鋭鋒を引つ込めたが、議論は白熱し尽きることはなかった。

西郷の決意を受けた岩倉、會議を押し切る

議論が尽くしたあたりで、一時休憩に入った。その休憩中、薩摩の岩下方平（元精忠組で薩摩藩家老。小松・西郷・大久保と薩摩藩を主導した人物）は、御所内の警備を担当して議場には入らないでいる西郷に、「形勢すこぶる悪し。いかがしたものでございしょう」と、議場の模様を伝え西郷の意向を聞いた。

「この期に及んで、何を迷っているのか、断の一字あるのみ」と、西郷は腰に差している小刀の柄を指差し、「これで片はつきもうそ」と平然と応じたという。御所内に引き込んだ武装兵を指揮している西郷の口を突いて出た大胆極まる発言であった。ここまで来て、形勢すこぶる悪しなど、世迷いごとを云っている場合か。腹を決めてここまで来たのではないか。そのために武力を用意しているのではないか。反対する者を皆殺し

にすれば済むことではないか。西郷の指摘は考えてみればその通りであった。

西郷の断固たる決意を知った岩下は西郷の判断を深く了解して議場に戻ると、そのことを岩倉具視に告げた。西郷の断固たる覚悟を知った岩倉は、自身の不覚悟に気が付き、改めて不退転の決意を固め、みずから短刀を懐中に忍ばせ、芸州藩主浅野長勲等周囲の二、三者へ決死の覚悟を告げた。驚いた長勲は家老の辻将曹を呼び土佐藩家老後藤象二郎に話をして容堂の動きを止めさせるように命じた。後藤は大久保を説得すべく動いていたが、その進展がないところへ辻の話聞き、容堂の説得に回り何とか容堂を説得した。

再開した會議では、岩倉等の強い決意を知った、容堂や春嶽等の公議政体派が一斉に鳴りを静め、その後は岩倉主導で、慶喜の將軍職（政治の実権）剥奪、徳川家の領地返上などが議題の中心となり、その結果、徳川慶喜の官位一などが減じられ、幕府領約四百万石のうち二百万石の返上などが決定されることになった。

公議政体派の巻き返し

しかし、二百六十有余年の長きに亘り巨大な力を蓄えて来た徳川幕府が、一夜のクーデターで倒れてしまうほどやわな組織でないことを、西郷は知っていた。果たせるかな、やがて慶喜擁護派からの巻き返しが始まるのである。

越前藩や土佐藩を始めとする徳川家擁護派の公議政体派の巻き返しにより、やがて、武力討幕派の薩摩は孤立に追い込まれるので、長州は未だ朝敵のまま国会議に参加出来る状況にはなかった。小御所会議の決定から時勢は大きく変わりつつあったのである。岩倉・西郷・大久保等は逆に孤立し追いつまれて行く。このままでは、慶喜の復権も近いと思われた。これでは行かぬ、武力以外に道はない。西郷はそう思っているが、理由もなく武力を行使することは出来ない。恭順を表明している幕府を討つには大義名分が必要であった。

武力倒幕の謀略（西郷の陰謀・江戸擾乱策）

西郷は江戸にいる腹心益満休之助、伊牟田尚平に密命を与えた。益満は尊攘の志士として名高い相

楽総三を味方に付けて大勢の浪士・無頼漢を募り行動を開始する。

彼らは薩摩三田藩邸を根城に、江戸内外を横行して、豪商の家に押し入り、幕吏の邸宅を襲って略奪・殺傷をくり返し、江戸城二の丸に火を放つなどの乱暴狼藉を働き江戸市中を恐怖に陥れた。市中にはこれに便乗して騒ぎを起こす者も出て市中は混乱の極みとなっていたのである。

幕府を挑発する「江戸擾乱」策であった。幕府は賊が薩摩藩邸から出動している事実を突き止めた。その結果、遂に、慶応三年十二月二十五日、幕兵と庄内藩兵等は薩摩藩邸と支藩の佐土原藩邸を焼き打ちした。薩摩の狼藉と挑発に怒った幕臣らは大坂に在城する將軍慶喜に激しく薩摩に鉄槌を下すことを求め大いに士気が昂揚したと云う。

慶喜が「討薩の表」を作成し、朝廷に差し出したのは、年が明けた慶応四年（一八六八・明治元年）一月一日である。

薩摩の罪状を挙げ、奸臣どもを引き渡すように朝廷に要求、これが採用されないならやむを得ず誅戮すると、威嚇めいた朝廷への宣

戦布告ともいうべき内容であった。

小御所会議後の京都の政治情勢は明らかに公議政体派に有利に展開しており徳川追討を主張する岩倉、西郷、大久保は朝廷内で孤立しかかっていた。徳川方が今少し自重しておれば、確実に事態は有利に好転すると思われた時期であった。かくてはならじと、西郷が、江戸で幕府を挑発し先に幕府に手を出させ、一気に世論を討幕へ持って行こうと考え出した秘策が、浪士らを動かし江戸攪乱策であったのである。

西郷の謀略にまんまと乗せられた徳川方の決定的な失策となった。巧みに錦の御旗を得て官軍となった薩摩・長州勢は鳥羽・伏見の両街道を京へ進む幕府軍を圧倒的な火器により粉碎して武力倒幕の戊辰戦争に突入するのである。討幕の密勅も偽造、錦の御旗も急拵えのものであった。ともかく官軍となった方が勝ちという戦略であった。

武闘派で豪胆な西郷隆盛の断固たる決断で、維新史は終盤の山場を迎えたのである。現在に至るも徳望があり高潔の人とされる西郷

の人氣は高いが、幕末の西郷の策謀は誠に凄まじいものがあり、「敬天愛人」を標榜し、情の人と知られる後の西郷像とは大いに異なる。西郷像がそこにはあったのである。

